

アート・リサーチセンター2000年度 春季連続講演会

第1回 「エジソンの映像に学ぶ～映像ジャーナリズムを志す若者のために～」

講師：鈴木昭典（株式会社ドキュメンタリー工房代表取締役）
会社所在地：大阪市北区大淀南2-6-3 島田ビル301

2000年6月2日（金） 於：アート・リサーチセンター多目的ルーム

はじめに

映画が発明されて110年を数える。わずか1世紀余り前に出現した動く写真、それが溢れんばかり、猫も杓子も映像の時代だ。その中で、ふと眉をひそめさせるのが、日本映画の衰退と、どこを回してもお笑いタレントばかりのテレビ、インターネットを通じて飛び込んでくる、過激な、モラルに欠ける映像群である。

こういうことが言われはじめてからも、結構日時が経過している。みんながこれではいけないと、心配しているにも関わらず、その加速度は止まりそうにない。殆どその原因は、経済優先の社会構造にある。その社会構造を作ったのは人間だから、少なくとも今の時代に生きる者は、罪を負わなくてはならない。私自身、ほぼ半世紀ドキュメンタリーを作ってきて、こういう状況に反発してきたが、会社から給料を貰ってきたのだから、加担してきた後ろめたさはある。

20世紀は、映像の世紀といわれるが、実に沢山の映像が生産されてきた。私と20世紀の映像との出会いは、昭和43年 1968年 の明治100年の年に、日本この100年 というシリーズ番組を作った時にはじまる。

その時に衝撃を受けたのは、アメリカの従軍カメラマンが最前線に出て実際の戦闘をカラーで生々しく記録された映像だった。今では日常的に使用されているが、フィリピンや沖縄で特攻隊がアメリカの航空母艦に突っ込む瞬間や、サイパン玉砕で崖から身を投げる姿や、戦死者の死体などがごろごろ写っていた。

それまで、見てきた戦争のニュースといえば、ハワイの真珠湾を攻撃した海軍航空隊や威風堂々と波を蹴立てる連合艦隊、南方に進出したわが陸軍や精鋭といった、いわば戦争の本当の姿は極めて少なかった。技術の違いもさることながら、映像は撮り手によって非常に違うものだとすることを改めて知らされた。

20世紀の映像を集めるという作業は、朝日放送を退職し、ドキュメンタリー工房を作ってからもずっと続いている。1990年からスタートした朝日放送の深夜番組 映像タイムトラベル は、途中2年ほど中休みしたが今も続いている。400本以上放送している。

軍国少年だった私は、一番多感な中学生時代と太平洋戦争と一致しているためか、作ったドキュメンタリーも戦争と平和、戦後のアメリカの占領政策などが多く、日本国憲法の生い立ちを描いた「日本国憲法を生んだ密室の9日間」などもそのジャンルの一つだ。こうしたドキュメンタリーの調査のためにしばしばワシントンに行き、国立公文書館や議会図書館、ペンタゴンなどに足を運んで、資料や昔の映像を探ることが重要な仕事となった。

今日のテーマである、映画誕生期のエジソンのフィルムに出会ったのも、そうした仕事のひとつで偶然の発掘ではない。

ペーパープリント・コレクションとの出会い

「ペーパープリントというのが議会図書館のフィルム・セクションにあるのですが、興味がありますか？」5年くらい前、何度かワシントンに通っていた時、コーディネーターの女性に聞かれた。ペーパー

ーという単語がいけなくて、多分映画のスチール集だと早合点して、生返事をしていた。しかし足を運んで調べるだけ調べて欲しいと依頼をしていて、忙しさにかまけて忘れていた。

しばらくして、調査の報告がきて驚いた。どんなものでも、こちらに好奇心がないと、すばらしいネタも取り落としてしまう。紙は紙だが、ちゃんとフィルムの方をした長いもので、しかもエジソン社やアメリカン ミュートグラフ アンド バイオグラフ社など1890年代からの映画創世記のフィルムが揃っているというコレクションだという話なのである。3000項目、30万メートル、上映時間にして185時間という膨大なもので、1890年代の初頭から1912年までの劇映画、コメディ、ドキュメンタリー、ニュース映画に近いものまで網羅しているという。

これだけ聞けば、好奇心がなくても食いつく人は多い筈だ。ペーパープリントなるものに話を進めよう。

映画の誕生当時、写真には著作権があったが、まだ映画は対象ではなかった。映画の市場性と将来性を見通していたエジソンは、写真としてでも著作権を確保しておくことに気が付いて、フィルムを紙焼きして議会図書館に持ち込んだ。当時も今もそうだが、アメリカでは著作権を申請するお役所は議会図書館で、知的所有権については作者を擁護する立場で、法律にない分野でも知らない顔はしない。

他の製作者もあとを追い、申請は1894年にはじまり映画の著作権が出来る1912年まで続いた。

この写真映画は、いわゆる駒焼きではなく、フィルムを長い印画紙に焼き付けたもので、ペタ焼きが長くなったものというイメージだ。しかし、材料が紙だから映写機にもかからず、長い映画ロールの始末に困り 地下室に積み上げられたままになっていた。

戦後になって、「ハリウッドのなんでも屋」ケンブ ナイバー氏が、ボロボロになっている写真から1コマ1コマ、フィルムに焼き戻した。10数年かかって、1967年にリストとともに完成した。

このマザーに当たるペーパープリントは、ニュー

ジャージーの倉庫に保管、密封されていて誰も見ることができない。ワシントンの議会図書館のフィルム・セクションを訪ねた時、取材者のために数作品が置いてあって見せて貰ったが、意外に映像がきれいだっただけには驚いた。劇映画では、5～600フィートの長いものがあるが、実写フィルムは、50フィートの小さな巻きで、1898年にエジソン社が日本に来て横浜で撮影した競馬場への道などがあつた。50フィートというのは、当時カメラに入るフィルムの長さそのものだ。

ナイバー氏の努力の結晶ともいえるこのペーパープリント・コレクションは、予算の関係で残念なことに16ミリしか出来なかった。最近、好景気のアメリカは、議会図書館のために特別予算を組み、35ミリの複製に着手した。はじめて3年くらい経ったというが、まだ10年以上かかるという

このコレクションのすばらしいところは、著作権申請の書類が残っていたため、何時誰が、どこで、何を撮影したかの記録があることだ。ナイバー氏の編集助手だったベイブ・バークステイン氏が、それをもとに詳細なカタログを作ったことが、このコレクションの価値を高めている。

映画の本を読んでも、見ていない限り一つも面白くない。多分この講演を聞いている人もそういう気分になっていると思う。エジソンはじめ創世記の映画の開拓者の話を展開する前に、100年前の映画を見ていただく。これは、全部がペーパープリント・コレクションではなく、アメリカでは有名なトーマスアーマッド・コレクションからの名作も入っている。

VTR 「キネマの夜明け」Vol.1からの抜粋 約20分

映画黎明の時代

まず、この時代、つまり1890年から25年近くがどういう時代であったかを知っておく必要がある。

1890年というのは明治23年。日本は近代国家としての産声をあげたばかり。その前の年明治22年に大日本帝国憲法が生まれ、23年には、富山県で米騒動が起こり軍隊が鎮圧に出動、第1回総選挙が行われている。世界に目を転じると、当時ハワイ

はカメハメハ王朝の時代で、アメリカの海兵隊が上陸して反政府組織を作り、王政を廃止している。イギリスが南太平洋諸島を領有し、フィリピンでは、ホセ・リサルがスペインに対して独立運動を展開、明治27年には日清戦争が勃発している。日本は、この戦争に勝って清国から遼東半島を割譲されたが、独露仏の三国干渉によって返還している。同じころ、イタリアはエチオピアに侵攻し、フランスは、マダガスカル、インドシナ半島を植民地化し、列強が清国の至るところに租界や租借地を作り、パックス・ホライタが世界を席卷していた。

孫文が独立運動をはじめ、義和団事件も起こっている。レーニンが革命運動を展開しはじめたのもこの頃、米西戦争、ボーア戦争など、世界中が権力争奪状況にあった。

明治34年足尾銅山で鉱毒事件が発生、東京に市電が開通したのは、明治36年。

日露戦争が、明治37年(1904年)にはじまり、翌年の4月閣議で講和条約が決まったあと日本海海戦があった。1914年に第一次世界大戦が始まっている。

いわば世界はニュースだらけだった。これが、映像の世界にも大きな関わりをもつようになる。

エジソンとその周辺

エジソンは、1900年に53歳だから、映画の卵のキネマトグラフに手を染めはじめた1890年は43歳。人生でいえば最も成熟した時期にあたる。既に、日本から竹を手に入れて炭素フィラメントの白熱電球を完成していたし、発明した蓄音機は、音楽好きの若者の人気を博し、名声と巨万の富を手に入れていた。

時代は、産業革命以来鉄を手に入れた国が強大になり、更に電気を手に入れたことで時代は大きく変わろうとしていた。すでにマンハッタンは、摩天楼の時代でビルの建築ラッシュ、地下鉄の工事が進み、自動車は町を走り回っていた。発電所があちこちに建設され、石油も掘り当てた。

発明家たちは、新しい技術の分野に如何に早く着目するか、如何に早く製品として世に送り出すか

の競争に血道をあげていた。今のハイテク産業のベンチャー企業を起こす若者たちの生態と似ている。

エジソンも、ニュージャージー州のウエストオレンジに巨大な研究所を建設、1887年の12月に操業を開始している。5棟の研究棟には、電気照明、蓄音機、鉱物研究など各分野の施設があって、工作機械や化学実験装置などが所狭しと配置されていた。

エジソンは、「女性用腕時計から機関車まで」をつくり出せる設備をと常に言いつづけ、外部に依頼することを非常に嫌った。それは、経済的にも損だし、研究の機密が漏れることを心配したと同時に、開発作業中にアイデアが出る事が多いので、チャンスを失うことを恐れたのである。

エジソンという人は、こうした事業展開の時、不思議にパートナーに恵まれていて、ウエストオレンジ研究所も建設から運営にはチャールズ・パチェラーというイングランドからの移民の英国人が力になった。パチェラーは、もともとはマンチェスター育ちの金属加工職人で、アメリカに渡ってからマサチューセッツやニューヨーク周辺の繊維工場を渡り歩いていた。エジソンとの出会いは1871年で、工場経営の経験もあって、実験プロジェクトにのめり込んでしまうエジソンとは、格好のコンビだった。

この研究所は、今はアメリカの国立公園局が管理する博物館 エジソン・ヒストリカル・サイト になっていて、小学生からハイスクールの生徒たちの団体が毎日ひっきりなしに訪れ、制服を着たレンジャーが親切に説明している。

ディクソン もう一人の主役

映画の撮影装置の発明者を厳密につきつめるのは、いろいろな要素が組み合わさっているのが非常に困難だ。しかし、エジソンは、少なくとも一般社会に認知させるところまで到達させているという意味で、トップにランキングされても良いと思う。

エジソンが、動く写真装置の開発を決意したのは、1882年の2月に、プロ写真家の草分けであるイー・ドウィアード・マイブリッジが講演に来た時だ。彼は動いている動物の連続写真を、ゾートローブを使って再生してみせた。

ゾートローブはVTRでも紹介しているが、イギリスの数学者W.G.ホーナーが発明したもので、絵が消えても残像が残るという原理をみつけていた。同じような研究はフランス人の実験家エチエンヌ・マレーも手掛けて、成果をあげていたが、エジソンは、そうした情報もしっかり手に入れていた。

マイブリッジに刺激されたエジソンは、ゾートローブの構造を実際にみて、レコードと結び付け、並べた写真を移動することを考えれば、繰り返してはなくストーリー性がある映像の流れが出来ることに気が付いた。

彼は、この開発プロジェクトをウィリアム・ローリー・ディクソンに命じた。VTRでカメラマンの挨拶を演じているが、このディクソンこそがアメリカの映画史を生み出した元祖ともいえる男だ。彼もスコットランドからの移民で、アメリカへ来た理由は、時代の先端の発明という仕事をエジソンから学びたいためだった。若い野心家だったディクソンが、エジソンに書いたこんな手紙が残っている。

「もし私を採用して下さるなら、仕事のさせがいがあるとわかって頂けるまで、どんな仕事でも引き受けます。私はあなたの仕事が本当に好きなのです。」

文面に迸る熱気は、今でも十分通用する殺し文句だ。就職に狂奔している学生諸君にも、多分役に立つのではないだろうか？

写真大好きという下地がこのプロジェクトに大きな貢献をするが、エジソンの配下では異色な存在で、がさつな機械工などの中では、抜きんでダンディーな青年だった。非常に多趣味で自己顕示欲が強く、人前でバイオリンなどを上手に演奏もできた。彼の場合、多彩な才能がすべて活動写真というニューメディアの開発向きだといえる。エジソンは映画の仕事にもまたすばらしいパートナーを手に入れたのである。

ディクソンが、エジソンのアイデアを受け継いで最初に手掛けたのは、音の再生と同じ発想だった。当時商品になっていた録音の蝸管と同様な、シリンドラーに小さな写真を貼りつけて虫眼鏡で覗いて

みようというものだった。しかも欲張りにも、音も一緒に再生できる仕掛けだった。いろいろなネックがあった。如何にも写真が小さすぎる。円筒に写真を貼るわけだから周辺はピン트가合わない。映像は間欠的に止めた方が美しい。

機械的な工夫でそれには成功したが、音声は連続的でなければならない。エジソン自慢のモーターを使って駆動したが、苦勞の割には魅力の方は一つも二つも足りなかった。

しかし、その年1888年の10月には、この方式で何とかするという自身を持ったのか、エジソンとディクソンは「動く風景」の装置として、特許申請の予告記載の手続きをとっている。エジソンの欲張りな事業家としての顔が見え隠れしている。

こうした不自由な「動く風景」再生装置は、1年が経過した1889末にフィラデルフィアのカーバット社やロチェスターのイーストマン・コダックなどが開発した、感度の良い乳剤を使った長いフィルムの存在を知ることによって一挙に前進する。シリンドラーを回転させることから長いフィルムの帯を移動させるという、画期的なアイデアに辿りつくのである。しかし、そのフィルムは、エッジにギザギザが刻んであり、ラチェットに引っかかって進むもので、スチール・カメラの巻き取り程度では十分だが、一秒間に1フィートのスピードで動かすと破れてしまうものだった。でも、そこから両端にパーフォレーションをあけるまでには時間はかからなかった。

そして最初に作ったのが、フィルムが横に走る方式の帯フィルム式キネトグラフで、撮影カメラの基本的な要件であるシャッターとレンズとフィルムの駆動装置がついていた。VTRの中に写っていたもので、駆動装置に2つのモーターが使われていた。

こうしたメカニズムの開発の成功は、ウエストオレンジ研究所の別の分野の通信技術の専門家たちの功績であった。当時の通信技術はラジオの発明以前、キーを叩くモールス信号・トントーの時代で、その信号を穿孔紙に穴をあけて自動的に送信するテレタイプの技術が注目を浴びていた。フィルムの駆動装置のアイデアはそこからで、エジソンの何でも内輪でやるという経営者の考え方の成果だった。

横送りだったフィルムが、やがて縦に移動する形のキネトグラフに変わるが、この時既にフィルムの幅が35ミリになり、1コマあたり4つのパーフォレーション、1秒間に約1フィート16コマという(実際には20コマくらいだった。)サイレント映画のスタンダードが確定した。勿論、キネトグラフの構造もフィルムの方式も、エジソンの特許になった。

キネトスコープとシネマトグラフ

こうしたフィルムの帯に写された映像を、どう再生して見せるかで、映画の主役が劇的に交代するのが、キネトグラフとシネマトグラフの戦いである。

ディクソンは、その長いフィルムを頭とお尻をつなぎ、エンドレスにして松の木箱の中で回転させ、白熱電球の上にシャッターを置き、通過するときに短い時間露光する映写機を考案した。エジソンは、キネトスコープというブランド名をつけた。

一人の人が、箱の上から覗いてみる仕掛けで、コインを投入すると動くようになっていた。当時バカ当たりしてエジソンの大きな財源になっていたコイン式蓄音機と同じ発想だ。エジソンのねらいは、大型スクリーンに写して大勢の観客を集めて見せるというのではなく、娯楽パーラー、デパート、ホテル、バーに売り込むことで、映画の新しさを宣伝することだった。

パーラーに蓄音機と並べて置かれたキネトグラフは、忽ち熱狂的な集客能力を発揮する。ニューヨークのブロードウェイ沿い127番地のホランド・ブラザーズ娯楽パーラーには、数十台が置かれたが、一回で1分弱のフィルムを見るために詰めかけた人々が引きを切らず、夕方6時閉店を午前1時まで延ばしても列を消化仕切れず、無理やり閉めて鍵をかけてしまったという。動く映像の魅力は、テレビがもたらしたブームどころではなかったのである。1894年のことである。このパーラーが一日に稼いだ金額は、120ドル。今の1000万以上にあたるだろうか？

キネトスコープのある場所は、すぐに名所となり、エジソンは、開発に投じた資金、2万4000ドルをあっという間に回収してしまった。1895年までに稼いだ金額はなんと7万5000ドルにも上った。

エジソンの先見の明は敬服するばかりで、料金は機械に投じるコインが稼ぐが、人を呼び寄せるものは、フィルムの内容であることを見抜いていた。

実験段階から、ちゃんと映像が写るメドが立ったら、すぐに商業ペースに乗せるにはどうしたら良いかの手配を始める。その一つがソフトの充実である。VTRでも説明したが、ブロードウェイの人気ものをウエスト・オレンジまで呼び寄せ、ギャラを大奮発して出演してもらった。エジソンやスタッフが夜にスカウトに出掛け、当たっている演し物のスターに声をかけたりしたという。

もう一つは、ウエストオレンジ研究所の構内に撮影スタジオを建てたことだ。研究所の一隅に縄を張っての撮影には限界があることがわかり、良い作品、売れる作品をつくるためには、撮影専用の場所が必要と考えた。天井が開くようになった建物は、太陽を追って回転するようになっていた。真っ黒な異様な形をした建物は、囚人護送車 ブラックマリアと呼ばれ、人気ものの俳優たちが引きも切らず出入りしていた。

キネトスコープとエジソン社制作のフィルムの人気は、鳳仙花の実がはじけるようにアメリカを飛び出し、1年も経たずにヨーロッパにアジアに進出した。日本に上陸したのは1896年。神戸の高橋信治さんという貿易商が機械と一緒に輸入し、神港会館で アニーオークレー や さらしシスターズ などの名作5本が上映され、大人気を博している。それからすぐ、活動大写真は日本の繁華街を席卷することになる。

全く順風満帆に見えたキネトスコープが、一つの発明によって忽ち破れる。フランスのリュミエール兄弟が発明したシネマトグラフがアメリカに上陸したためであった。1895年のことであった。

シネマトグラフは、極めて小さく手回しで簡単に撮影できる仕組みだった。しかし、シャッターや間歇駆動のシステムは全く同じで、5年前にディクソンが苦労してたどり着いた技術で出来ていた。エジソンの特許とどういう関係かわからないが、フィルムも35ミリで1コマに4つのパーフォレーションのあいだのものを使用していた。レンズの解像度もよかった

ようで、今残っている映像を見ても美しい。

このシネマトグラフの特徴は、撮影機の後ろをあけて、アーク灯のランプを置くことで忽ち映写機に早変わりすることにあった。撮影の逆の倍率になるわけだから、大きなスクリーンに映写できる。シネマトグラフの試写会で、迫ってくる列車を上映したところ観客が怖がって劇場から飛び出したというエピソードがあるが、巨大画面の魅力は、覗き眼鏡でみる映像のイメージとは全く違う驚きをもたらした。

エジソンの惨敗は、明かであった。

エジソンだって失敗する

この頃、エジソンのもう一つの重要な事業も危機に瀕していた。1892年に、ニュージャージー州西北部にあるオクデン鉱山を買い取り近代化を進めていたのである。事業欲旺盛なエジソンは、鉄が社会の近代化、インフラのキーを握るものだという確信を持っていた。ハドソン川やイーストリバーにかかる巨大な鉄の橋の建設や、摩天楼がすべて鉄骨で出来ていることを毎日見ているわけだから、一寸お金があって事業欲があれば鉱山事業に手を出したくなる時代だ。実際金を求めて西部に走ったヤンキーたちと同じ血の騒ぐ連中の目標としては、かなり固い事業といえた。

このオクデン鉱山で彼が目論んだのは、選鉱作業の近代化であった。当時モッコに入れた鉄鉱石を手で選別していたが、それをベルト・コンベア式にすることで、生産性が上がると考えていたのである。彼の考え方は、この分野でも独創性を発揮し、自動選別によって、鉄の含有率20%以下の従来捨てられていた鉱石を大量に集中管理すれば、鉄鋼産業に大いに寄与する筈というものだった。機械は、コンベアのシステムの最初の所で鉱石を粉碎し、磁石を使って純度の高いものだけを選別する機能を持っていた。最終的に濃縮された鉄鉱石の含有率は68%にも上がった。

事実、東部の溶鉱炉は、鉱山の枯渇で鉄鉱石をキューバやスペインから輸入しなければならないほど困っていた。

彼は、この事業にウエスト・オレンジ研究所の利

潤も全財産もつぎ込んでいた。オクデンには、鉄道が敷かれ大きな町が出現した。すべてエジソンのつぎ込んだ資産が化けたものだった。彼の計算では、この事業で1000万ドル以上の生産をあげ、300万ドル儲かる筈だった。

ところが、そんなに上手くいかなかった。巨大な投資をした機械は、ウエスト・オレンジの研究所で作ったものだが、しばしば故障を起こして生産中止が続出した。エジソンが負担しなければならない赤字は、毎週6000ドルにものぼった。

この鉱山からやがて手を引くことになるが、ちなみに、このコンベアシステムは、のちに彼の友人であるヘンリー・フォードによって自動車産業の中で輝きを発することになる。

更に、活動写真の開発部門には、大きな痛手になる事態が発生していた。キネトグラフの開発に最初から関わっていたウィリアム・ディクソンが、シネマトグラフがアメリカに上陸した年の1895年に、ウエストオレンジ研究所を去ったことである。尊敬していたエジソンではあったが、アイデアを連発し性急に達成を要求する性癖に、辛抱の糸が切れた……これは若干私見も入っているが、当時外部との共同研究の仲間だったライバル社のレイサム兄弟と親しくなりすぎたのがエジソンの癪に障ったというのが定説になっている。

そのディクソンが、アメリカン ミュートグラフ アンドバイオグラフ社を作り、すぐれた映写機バイオグラフを開発、人気を集めていた。強力な敵となって現れたのだ。

その撮影カメラは、エジソンの特許に触れないために苦心惨憺したものだった。彼は画面を更に美しくするために、フィルムを68ミリ幅にした。

映写機は、リュミエールのようにカメラと兼用ではなく、アーク灯をもつ立派なもので、大きく鮮明な映像はきわだった技術を誇示していた。(この大型フィルムは経済的にも大変ということで、後には36ミリにもどり、フィルムにパーフォレーションをあげず、カメラに穴をあける装置を付けしかも数も一つにした。)

もっとショックなことは、ブラックマリアと同じような

撮影スタジオを、ブロードウェイの事務所の屋上に建て、地の利を生かして有名なスターを使ってどんどん映画の量産を始めたことだ。今、ペーパープリント・コレクションにも、ムキムキマンのユージン・サンダーなど同じスターの作品が幾つも発見できる。劇映画のフロンティアの監督の一人、D.W.グリフィスも、パイオグラフ社に腰を据えて、いろいろな作品を撮りはじめています。

エジソンの真骨頂

しかし、ここで白旗を揚げないのがエジソンのしたたかなところである。

まず、当面の敵であるシネマトグラフのアメリカ上陸を阻止すべく、税関や輸入もとに圧力をかけた。それが効果があったかどうかは、今となっては明確ではない。

そして、フランシス・ジェンキンスとトマス・アーマッドというワシントン在住の発明家が、いい映写機を開発していることを聞き込み、代理店のキネトスコープ社を動かして権利を買い取った。エジソンは、自力で売るよりエジソン・ブランドをつけた方が良く売れると説得し、ヴァイタスコープと名前をつけた。

1896年4月23日は、巻き返し作戦の勝負の日となった。ニューヨークのコスター・バイアルズ・ミュージック・ホールで開かれた、エジソン＝アーマッド映写機の披露イベントは、新しいものに慣れきっているボードビル演芸場の観客の万雷の拍手を集めた。ヴァイタスコープに注文が殺到し、アメリカ中の繁華街の演芸場に置かれ、入場料も覗き眼鏡の数倍に跳ね上がった。わずか50フィート、1分足らずの繰り返しと違って、ヴァイタスコープは、どんなに長い作品でもかけられる映写機だった。しかも一人の映写技師と一台の映写機で数百人の観客を満足させられることが、興行価値を能率面からみた画期的な違いであった。

エジソンのこれまでの苦境を知らない新聞各社は、偉大なウエストオレンジ研究所の快拳として絶賛した。人さまの発明したものに手を入れたに過ぎないが、エジソンの経営者としての決断が、リュミエールを撃退した。その日は、アメリカの映画史のま

さに転換点であった。

エジソン自身も、映画の未来に対する可能性を改めて認識した。そして、映画フィルムの制作に全力をあげるように大号令を発するのである。

100年前の映像群

映画の成功を知った企業ギャンブラーたちは、雨後の筍のようにフィルムプロダクションを設立した。映画産業の独占を目論んだエジソンの野望は打ち砕かれたが、それより遙かに活力のある市場が出現した。フィルムの需要は、最大の施設を持っているエジソン社でも追いつかず、下請けに出さないといけない状況になった。

エジソン社が企画した機関車の大衝突を撮影している最中に、次の企画のためにスターにつばをつけ、キネトスコープ部(まだ名前が変わっていなかった)はフィルムの注文とりに奔走していた。映画が娯楽産業として回転をはじめたのである。

フィルムは、なんでも写せば商品になった。

撮影の対象は、風景、乗り物、事件、旅行記、コメディ、短い劇映画、とあらゆるジャンルに広がった。

最初のディクソンが自分を写すことから始まった映画は、キネトスコープ時代に、既に芸能人を出演させて、踊りやアクロバット、ボクシングを写したりしていただけの段階を脱して、劇的構成を持ったコメディが現れている。情報の運び手としてのキャパシティが、殆ど無限に近いことにいち早く気づいた作り手は、色々知恵を絞っている。ネコのボクシングや世界初のキスシーン(メイアーウィンのキス)は大当たりした。

ヴァイタスコープが出来る1896年春までに、エジソン社だけで220本の作品が作られているが、すべて50フィートのフィルムをワンカットで回し切っていた。ディクソンは、エジソンの命令を受けて、1894年に音声と同時録音を試み、自作自演でバイオリンの演奏をしたりしている。

このころのフィルムの感度は低く、勿論ライトはない。ブラックマリアでの撮影は、室内のように見えるが全部太陽光線、カメラも標準レンズが1本だけ。ファインダーがないので、カメラマンはフィルム・ゲートにピントグラスを置いて、焦点を合わせ構図をきめた。

画面が大きくなった1896年中頃から、カメラは精力的に戸外に出る。ナイアガラや摩天楼の風景や走る機関車、消防車の出動といった動くものが対象になる。そこから、社会現象とかニュースにカメラの目が向くようになる。

エジソンの映画を徹底的に研究しているチャールズ・マッサー氏は、「1880年代の末から1900年代初頭にかけて、映画は主として視覚的な新聞として使われた」といっている。その意味は、冒頭に述べた激変する世界情勢が、すべて映像になりえたとし人気も集まったからである。中でも戦争は集客能力の高いニュースであった。ハースト紙の愛国主義的な報道に煽り立てられて、米西戦争がカメラの魅力ある対象となるという発想はすぐに生まれた。パイオグラフ社がキューバに特派員を派遣すると伝わるやエジソン社は、ウィリアム・ペイリーを送って戦争映画を撮影させた。

ペーパープリント・コレクションを最初に手に入れて見た、実写の映像群で驚かされたのは、マンハッタンの自由の女神のすぐ側にあるエリス島に上陸する移民たちを写したもの、大きな荷物を抱えて下りてくる人達が、まだ100年前にいたという実感が迫ってくる映像だ。現代のアメリカ人のうち1億人の祖先がエリス島から降り立っているという思いを込めて実に熱心に写している。2作品ある。

当時ニューヨークは、建設ラッシュでビルの建築現場がいろいろ写されているが、クレーンにぶら下がったりする向こう見ずな野郎の映像がいっぱいでくる。

建設といえば、ニューヨークの地下鉄が開通したばかりの1906年に、驚異的な演出で走る地下鉄を撮影している。多分夜中に複線の片側にライトの列車を走らせ、走る電車の直後にもう一台電車を走らせて写している。驚くのは、到着する42丁目の駅のホーム、多分エキストラで動員された乗客がいっぱいいることで、何回リハーサルが行われ、何回NGが出たか知りたくなる。

資料として非常に価値の高い映像は、1906年のサンフランシスコ地震の直後の映像、世界初の地震の記録だ。サンフランシスコは、この地震の前のマーケット・ストリートの映像などが残っているから、

比較出来ることがすばらしい。

何でも撮ってやろうという、エネルギーが伝わってくるこれらの作品群は、ほとんど世界市場に輸出されて見られた。

日本に初めて輸入されたころ見られた映像は、ほとんどがこうしたエジソンとそのライバルたちが制作したフィルムだ。

海外取材とその撮影対象

知らない外国の風景は売れ筋で、エジソン社は1898年、プロデューサー、ジェームス・ホワイトとカメラマンのフレデリック・ブレンキンデンの二人を、はるばるアジアまで出張させ、中国や日本を撮影させている。

今日風に言えば海外取材で、高い船賃を、船を撮影することによって負けて貰った。タイアップである。その船が太平洋で大嵐に会い、体を帆柱に縛りつけ見事なカットを撮っている。

ペーパープリント・コレクションには、日本で撮影した10本が残っているが、横浜の伊勢佐木町界隈や根岸の競馬場への道、陸蒸気など、明治の貴重な動く風景が残っている。日本を写した最初の映像といいたいところだが、その前年フランスからリュミエールの取材班が来ているので、二番手になった。

1901年には、三番手のアメリカン ミュートグラフアンドパイオグラフ社がカメラマン、ロバート・ボニンを日本に派遣、横浜をはじめ、東京の日本橋、京都の祇園、神戸、長崎と船の寄港地で面白い日本の風俗を写している。

いずれも、カットを変えて編集するという演出方法を知らない段階で、相変わらず50フィートワンカット。画面が間延びしないよう人力車や伝馬船を集めてやらせ演出をしたり、自分が登場したり苦労している。

何方のグループも中国に足を延ばしているが、エジソン社が取材に訪れた1898年は、香港の九龍地区が清国と英国との間で、99年間の租借の調印がなされた年で、ドイツが膠州湾、ロシアが旅順・大連、イギリスが威海衛、フランスが広州湾という風にヨーロッパの列強が租借地を獲得していた。まさに白人のアジア侵略競争が中国大陸に展開していた時にあたる。白人のアジアへの関心が最高に

高まった時期なので、どんなところが具体的な映像で見られるといふだけで観客が集まった。ジェームス・ホワイトは、香港、上海などを巡っているが、日本を撮影したように一輪車やジャンクに住む人々など珍しい風俗をねらっている。

1901年にアメリカン ミュートグラフ アンド バイオ グラフ社のボニンが訪れた時は、前年に義和団事件が起こり、明らかにニュースを撮ろうという風に目標がはっきりしている。さきに触れた米西戦争も1898年の4月に始まり、スペインの大敗で12月に終わっていて、動く戦争ニュースは、アメリカの勝利の姿を確認したい観客で映画館を一杯にした。

義和団事件というのは、列強の侵略に憤った民衆の一部が(白蓮教系の義和拳教の秘密結社)北京の各国大使館を包囲して襲った事件で、米・英・露・独・仏・伊・澳・日の8ヶ国が軍隊を派遣して鎮圧した事件。清国は、4億5000万両という賠償金を支払わせられている。

ボニンが撮った2匹目のどじょうを狙ったフィルムは、やはり大当たりしたらしい。ほとんどは、軍隊のパレード風のものが多いが、それでは満足せず、各国軍隊に協力して貰って再現して撮ったりしている。

面白いのは、この撮影班が総理の李鴻章にミュートグラフを売り込んでいるフィルムがある。いずれにしる戦争の記録はフィルムニュースの重要な地位を占めた。

しかし、戦争が起こってもそんなにすぐ特派員を派遣して撮影することは、当時の交通事情では無理だ。1904-5年、明治37-8年の日露戦争は、日本が撮影した旅順攻防戦や乃木將軍の水師營の会見のフィルムがあることで有名だが、これがアメリカで大当たりした。それではという訳で、日露戦争の最前線部隊が橋頭堡を争奪する状況をマサチューセッツの森の中で再現したり、旅順港封鎖などをスタジオで撮影した。

海外取材班は、必ずしも戦争ばかりを追っていたわけではなく、エジソン社は、1900年のパリ万国博にジェームス・ホワイトを送り、20作品を撮影した。そのついでにスイス・ドイツなどの20世紀黎明の姿

を写している。

つまり、戸外を出たカメラは、黎明期にドキュメンタリーというジャンルを獲得しているのである。クルーを海外に派遣することに躊躇なく先行投資したエジソンの、プロデューサー的資質にも驚く。

エンターテインメントのスタート

1891年からの初期の映像は、VTRでも見た通り、カメラの前で誰かが演じるということに専念している。動きに魅力がなく、退屈は最大の敵だということは、関係者が一番最初に気づいた。

それは、ショーでもお芝居でもない、別のアイデアと手法が必要ということになる。そこで、セットを工夫、回転扉を使ってコメディを演出したり、編集によって人やモノを入れたり消したりする手法を見つける。

「ドッグ・ファクトリー」というコメディは、ワンカット演出の時代の作品だが、ペットの犬を怪しげなボックスに入れると、ソーセイジ様のものに変えられて店頭陳列される。客が現れ、テリアがよるしいなどと注文を聞くと、ボックスに入れて犬に戻して売る。現代のコメディでもちょっとできない見事な面白さが演出されている。

時代は前後するが、「ニューヨークのおいそが氏」という作品は、多忙男が一日の終わりに酔いつぶれて帰宅すると、家具やら何かが暴れまわる。大がかりな装置のトリックが編集の合成で効果的に描かれている。「マジカル・ブック」は、巨大な絵本から、コメディアンが出たり入ったり、お主よくやるなど演出家に声を掛けたいくなる作品だ。

合成は、大はやりだったようで、レンズの上半分には飛行船を漕ぐ男、下半分にニューヨークの俯瞰のパンを写して、空飛ぶ男を描いている。これは、戦後まであった撮影方法で、レンズの後ろに画面の上半分を隠すマスクをしてまず撮影し、フィルムを巻き戻して、逆に下半分を隠して撮影する。よく失敗したものである。

映画の黎明期は、ほとんどアイデア競争の趣を呈している。1902、3年ころにできた「ご注文は卵」と

いう作品は、割った卵が瞬間にヒヨコになるというもので、見事な編集テクニックには脱帽する。この作品には、裏話があって最初に作ったプロダクションの編集は、下手で実に間延びしている。このフィルムを手に入れたパイオグラフ社が編集し直して、スピーディな動きにした。面白さが倍増して大当たりしたが、この種の盗作は、当時横行しまくった。

エジソンの作品にはよく見ると、大事な場面の中に1コマ コピーライトはエジソン社 と書かれたフレームが挿入されている。丁寧なのは、書類のコピーを作品の末尾につけてあるものもある。

一本の映画を作るのに、当時でも何百ドルもかかったにもかかわらず、実際に著作権の意識は薄かった。現像・プリントは、それぞれの撮影所にラボがあったからすぐに海賊版ができた。いまのビデオ・コピーと同じだ。知的所有権の概念は、アメリカでも熟していなかったのである。

エジソンは、蓄音機の発明の特許とレコードの著作権によって百万の富を得た。事業家エジソンは、キネトスコープが人気を博し、直ちに特許を申請したが、その時にフィルムの著作権を申請しようと試みた。この新しいメディアに適した法律はなかった。

ペーパープリント・コレクションの紹介をした時触れたように、写真著作権として申請したのもエジソンの苦肉の策であった。

1908年に、エジソンは映画特許会社 (MPPC) を作った。目的は、エジソンのような発明家が映画の特許に対して公正な支払いが受けられるよう「不正で破滅的な競争」を終わらせることで、映画技術のあらたな開発の必要性をなくすというものであった。要するに「エジソンが発明したものをお金を払って使えば、無理をして違う機械を開発する必要はありませんよ」ということで、エジソンの特許を独占的に使用できる社が加盟する企業組織 (トラスト) で10社がメンバーになった。これは、後々アメリカの映画企業の著作権の考え方の基礎になったもので、フィルムそのものを売るのはなくて、所有権を保持したままその上映権が売買された。この特許会社は、1909年から14年までに100万ドルの利益を出し、その大部分はエジソンの懐に入った。

一方国の映画著作権に関する法律の整備は遅れた。その大きな理由は、著作権は、個人の知的所有権という原則があるが、映画は、カメラマン、監督、俳優という風に沢山の人間が関わり、企業が纏めるという姿なので、誰に著作権料を配分するかが困難なためのものであった。

その映画の著作権は遅れて1912年にやっと写真から離れて独自の法律が制定された。その著作権法の精神と、独占権の欲しいエジソンの狙いとは、全く別のものであると考えた方が良さそうだ。いずれにしる、トラスト会社ができて、著作権法が生まれても、海賊版はなかなか防げなかったという話だ。

「ご注文は卵」は、オリジナルと海賊版の両方が残っているので、映画の編集技法の進歩の過程を見ることが出来て面白い。

アメリカ映画史に最初に登場するドラマは、1899年に作られた僅か2分30秒の「Love and War」。米西戦争を舞台に家族の別れと再会を見事に描いている。エドウィン・ポーターの撮った大列車強盗は、カットを割って撮影した殆ど最初のもので、列車の窓にスクリーン・プロセスが使われている。同じ作品を翌年ルービンが、同じ演出、同じカット割りで場所を変えて撮った。贋作というか何と呼べばよいかわからない。

映画監督第1号の、D.W.グリフィスの作品も、ペーパープリントに沢山残っている。日本を舞台にした「オヤマのこころ」は中国か日本かわからない舞台と衣装で、日本女性の健気さが描かれている。蝶々夫人のアイデア頂戴といった作品である。

いずれにしる、作品は編集によって長いストーリーを作ることが出来るようになり、出演者もスター性の比重が高くなっていった。

エジソンのあくなき挑戦

1本1本の作品について一寸饒舌になりすぎたが、こうして映画が市民性を獲得し、それなりの文化を形成しつつある時、エジソンは何をしていたか？

エジソンは、蓄音機の成功に大変な自信を持っており、しゃべる映画トーキーへの挑戦を続けてい

た。家庭用のキネトスコープは、音も聞こえるということ売り出した。音は、今のようにフィルムにサウンドトラックが付くというシステムには縁遠く、蝋管を大きくして一緒に走らせる原始的なものだった。これも、レコードのような円盤の方が有利にも係わらず、頑固なエジソンは蝋管にこだわったという

エジソンは、大変な自信家で発明を予告し、実際に成功させることで新聞を飾った。このエジソン式トーカーも、1910年に報道陣を集めて計画を発表し、1913年にニューヨークのボードビル劇場を借り上げて大々的に発表した。音は活弁と音楽を録音しただけのものだったが、各紙は「ウエストオレンジ研究所からまた一つやってきた」と報じた。

この発声映画は、新奇さで人気を呼んだが、メカニズムが複雑で操作が難しく、本当の市場性は獲得できなかった。

こうした中で、エジソンの事業の別れ道の年を迎える。1914年、第一次世界大戦が勃発、研究所の組織に色々な影響をもたらしたが、もっと決定的な事態は、12月9日、ウエストオレンジ研究所が火事で焼失したことであった。当時のフィルムは、可燃性で、午後にフィルム倉庫から出火した火は夜通し燃えつづけ、ニューヨークからも見えたという。このダメージからも、エジソンは不屈の闘争心によって立ち上がり、それをきっかけに巨大な企業組織に編成替えする。その意味では、エジソンはあくまで企業家であった。

エジソンは、それから16年さまざまな足跡を残して1931年寝たきりになり、10月18日に息を引き取る。84歳であった。葬儀は、ウエストオレンジ研究所で行われた。

文化遺産としての映像ライブラリーの持つ意味

こうした100年前のフィルムが、いま美しい画で見られるアメリカのアーカイブの凄さに触れておく必要がある。

アメリカでは、国家予算で重要なフィルムを国立公文書館に集めて整理し、著作権の切れた映像は申請さえすれば使える。今20世紀の記録として

放送などに使われている第二次太平洋戦争の記録などは、殆どこのライブラリーのものだ。

一方、議会図書館の映像部にも、著作権申請された映像群がある。これも国の費用で整理保存されている。

そうしたアーカイブの整理のされかたが違う。黎明期の映像研究家として有名な、チャールズ・マッサー氏のような人が、見事な作品録を作っている。日本では、例えば、太平洋戦争中の日本のニュースは、NHKが独占していて、1秒6000円も払わないと使えない。それどころか、劇映画の各社でも名作を除いては作品リストがない。今、1日に数千人のカメラマンが撮りまくっているテレビの映像も、整理されているところは非常に少ない。使い捨て文化なのだ。

20世紀後半の日本の映像を、21世紀の後半に見ようとしたら、ちょっと混乱して何が何かかわからないだろう

私自身、映像に関わった昭和20年代の後半から多分4～500本制作している。私の作品は、横浜の放送番組センターに20本くらいあるが、朝日放送のライブラリーにある作品は、だれも見ることが出来ない。再放送をすることもないから、まさに死蔵状態にある。その一部をお目にかけてよう

ドキュメンタリー ジャビンド

インドネシア残留日本兵 1982年

映像は、フィルム、VTR、DVDと技術的に進歩していく中で、表現の方法も、撮影対象も画期的に変わった。映像は、文字や他のメディアでは、絶対に表現できない時間を共有できるという、絶対に有利な媒体なのである。付箋を付けて、見るチャンスを作るだけで、文化を継代していく大きな流れを作ることが可能なのである。

捨てられないためにも、次世代に見てもらえる良い作品を生み出し、映像文化を継代していく努力をしなければならない。そのためにも、沢山の若者が映像産業に意識をもって参加して、その仕事を受け継いで欲しい。